

---

# 王様狩りに行こうよっ！

閉まれドア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王様狩りに行くこっよっ！

### 【Nコード】

N8220Y

### 【作者名】

閉まれドア

### 【あらすじ】

「人は戦わなくてはいけない。」  
幻影のキングという人物の発した、あまりにも曖昧で抽象的な言葉が、ネットでは持て囃されていた。

どこにでもいるようなごく普通の平凡な中学生の富士見貴則は放浪の旅の末に5年前に生き別れた姉であり、学校で『幻影のキング』と呼ばれ絶大な人気を誇っている女子生徒・富士見希乃と再会し、全力で殴り飛ばした。

これは、居場所を求め旅をしてきた少年と彼を受け入れる仲間達との友情と、勇気を奮い立て巨悪に立ち向かっていく姿を描いた正統派王道青春巨大ロボットSF物語であるッ！（たぶん）

## プロローグ

人は戦わなくてはいけない。

倒すべき相手は常に身近にいる。

戦いを嫌うのは悪だ。

自分の可能性を否定する事だ。

今、君は戦っているか。

戦いから目を背け、今ある世界に妥協していないか。

もし少しでもそう感じているのなら、脱却しろ、その世界から。

叩き潰せ、その世界を支配するものを。

四日前の事だ、こんな言葉がネット上に放り込まれたのは。

そして瞬く間にこの言葉は拡散していった。

誰かがこの言葉に哲学的な深さを見出したのか、よくわからない何かと戦う決心をつけたのか、この言葉をネットに送り出した奴が凄いのか。

少なくとも俺はこの言葉に賛同しかねる。

倒すべき相手が何なのか、あまりにも抽象的すぎる。無責任だ。虫酸が走る。

理想的な単語を並べただけでは世界は変わらない。この発言をした奴は幻影のキングと名乗っていた。

このハンドルネームも気に入らない。

いくら何でもネーミングセンスが酷すぎないかこれは。

こいつ、名前登録する時絶対ドヤ顔でエンターキー押しただろ。じゃなかったら決定ボタンか、左クリックか、タッチパネルか。

いずれにせよドヤ顔だったという推測は間違いなく当たっているに決まっている。

俺はこのネーミングセンスに見覚えが、それと聞き覚えもある。

そいつがネットで幻影のキングとかいうハンドルネームを名乗り、格好つけて呟くだけで何万ものフォロワーから反応を受けている張本人だとしたら・・・とりあえず、とても痛くて世間に顔を出せないような気がする。

平日のせいか、アトウギ市の誇る駅前の市街一帯へと向かう車はとも少ないように見える。

俺が歩いてきた田園地帯にポツンと置かれた一本のごく普通の道路を道なりに、東へ進むと丘に突き当たる。

田園地帯が広がっているような所の目の前の丘と言っても、緑の映える丘というわけでは無い。

アトウギ市は神奈川県ほぼ中心部に位置しており、地図に載れば神奈川県代表的な市として数えられるほどの規模を持つ市だ。

田園地帯はおろか山の中に温泉街まで持っているのだが、田舎臭さがこの市の魅力というわけではない。

俺が歩いてきた田園地帯を含む山間部、温泉街は市の北西に位置している。

北に町や県唯一の村、ダム、西には県屈指の山がある市があったりで、その影響を大きく受けている反面、市の東側には真アトウギ駅を中心にビルやデパート、商店街などありとあらゆる物件が立ち並んでいる。

この神奈川の県央地区の市の中でもアトウギ市の市街地はかなり栄えている方だ。

この坂を上り切ると下り坂を下った先はずつと平地となり、アトウギ市街を一望する事ができる。

そしてこの丘のてっぺんには、ある高校がある。

神奈川県屈指の学力を誇る、アトウギ市を代表する公立校。永川高校。この学校には裏掲示板がある。

一時期は学校裏サイトと呼ばれて全国で問題になった代物の一つだが、数年経った今でもこの学校の生徒の間で頻繁に使用されているようだ。

だが覗いてみると、その使われ方はどうもよく一般に聞く裏サイトのものとは毛色が違う。

悪口とか陰口とか、そういう問題のある書き込みはあまり見当たらない。

流石は県屈指の学力を誇る模範校だ！・・・なんて褒めるべきだろうか。

そもそも裏サイトが存在している事を咎めるべきか。だがこの学校の生徒の大半が画面の向こう側に着目している。

ある人物が書き込むスレッドに異常な数の書き込みが押し寄せている。

一体何がこの学校の生徒の心を鷲掴みにしているのか。

何度その人物の書き込みを見ても俺には何が魅力的に感じられるのか理解できない。

発言でインターネットを賑わす謎の人物、ハンドルネーム、幻影のキング。

彼は彼の言葉全てを、この裏サイトに一番最初に載せているのだ。裏掲示板に書き込んで、その後別のサイトで呟く。

どうしてこの高校の裏掲示板から書き込みを始めるのかは分からない。

その理由を誰もが推測しようとするが、書き込んだ張本人の口から真意は未だに語られていない。

幻影のキング。

日本中のネットサーファーが注目する謎の人物。

ある高校の裏掲示板に最初に書く理由を推理してみるとしたら、やはりどう考えてもその高校の生徒だから・・・という理由しかない。そして俺は、幻影のキングという言葉に聞き覚え、見覚えがある。

坂を上りきったところを左に曲がる。

すると、並木林に囲まれた緩やかな坂の先に校舎が見えてくる。

この先に、この先にその高校がある。幻影のキングがいると思われる高校が。

学力の高い学校だけあって、正門はとても立派な構えをしている。青く茂る並木林を抜け、校門の先に立つ学校を視界に捉える。

「ふっふっふ・・・。」

女性の笑い声が聞こえた。

校門に女子の姿があった。

バサツと広がった金髪、白と黒のセーラー服。

女子はまるで俺がここに来るのを分かっていたかのようなしたり顔で、俺の姿を目で舐め回す。

こちら辺の学校では見る事の無い、無駄に青い学ランを開いて着用した少年を珍しがっている・・・という風に見るにすれば、女子の俺を見る目は感情がある。

俺の事を知っていて、探していて、待ち望んでいたような目。

その目が一通り俺を見つくして、俺の顔へと視線が戻っていく。

「待っていたぞ、富士見貴則・・・。」

女子が俺の名前を言い当てる。

こいつは知っている、俺の事を。

「ようやく辿り着いたようだな、我らの手による楽園、安住の地へ．．．。」

女子が俺に手を差し伸べる。

その後ろでは次々と生徒が校舎の窓から顔を出して様子見をしていた。

物珍しさに惹かれたのであろう、いつの間にか窓という窓は全て人で埋まっている。

「人は前に進まなきゃいけない。じゃなきゃ生きていく事はできない。貴則は生きているか？ 毎日を、十代の生きるべき日々を。私は生きる。毎日生き生きしようと頑張っている。毎日元気でいたい。楽しく日々を過ごしたい。その為には．．．。」

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！」

俺は大地を力一杯蹴り出し、右手に握り拳を作って女子へと走り出した！

「ほう．．．我が胸に飛び込んでくるかッ！ 富士見貴則イ！」

「どおおおおおおりああああああああ！！！！！！！！！！」

女子の頬に、拳を一発。

「ひびきっ！！」

「「「き、キングうううううううう！！！！！！！！！！」」」

この日、生徒達の悲鳴が学校中に響き渡った。



## 1話1 山菜狩り兼恋愛対策作戦会議

アトウギ市の北西部は山が連なる山岳地帯だ。

人の手が入っている事はあまりなく、二週間前に歩いた市街地と田園地帯の境界よりも人通りが少ない。

むしろ山間部に入ってきてから車を一台も見えていない。

温泉街の入り口の紅い派手なアーチが寂しげに道路へかかっている。そもそも平日に出入りが頻繁に見られるような所ではないのだから当たり前と言ってしまうえば当たり前前の光景かもしれない。

が、だとしても、今俺達が同道とど真ん中を歩いている道路は一応キョーカワ村というアトウギとは別の行政の地域に続いているはずなのだが・・・車も人も全く通っていない。

聞こえてくるのは道路のすぐ横に流れる川の音と、俺達の声と足音だけだ。

自転車を押している男子が二人と、徒歩が二人。女子が一人で、もう一人は俺。

計四人の学生パーティが山道を突き進む。

いくら放課後だからって、制服姿でこんな山の中を歩く部活はそうそう無いと思う。

俺達は今、既存の部活動をも超える、未知の険しい活動を行っているとも言える。

・・・言っただろうする。

「・・・さて、どこから登ろうか。」

自転車を押している長髪の男、日向岡成実が右方に広がる森林を見渡す。

森林へ入る隙間を探し、程よく登りやすそうな箇所を探す。

自転車を森林の前と言えど道路の脇に何台も止めておくのは抵抗が

あるが、俺がアトウギに来て早二週間、廃品業者や放置自転車の回収車の類を未だに見かけていない。

駅前の市街地でさえ見かける事は無かった。

こんな山の中に限って、ここぞとばかりに自転車が持って行かれるとは思えない。

まあ、こんなメンバーの中でそんな心配をしているのは俺だけだろうけど。

興味のある対象が視界に入ると、周りが見えなくなる。

小学生くらいの頃ならよくある事だが、流石に高校生にもなってそうであるのは子供すぎるのではないのか。

そしてそれに気づいて恥じるような事はしないのだろうか、ゼイ、アーは。

年上と言うより体だけが大きくなった同年代みたいだ。

だが年齢を笠に着ず、ここに来て二週間の俺に対し友好的に接してくる。むしろ馴れ馴れしい。

彼らの頭は空っぽなのだろうか。

こんな辺鄙な所に自転車を置いておいたら誰かに盗られるかもしれない、なんて事も頭の中には無いのだろうか。

「よし、作戦会議もいよいよ本番へと突入ですぜ！」

四人の中の紅一点、出縄晶が自転車を止める。

「え、こっから入るの・・・？」

「え、よくない？」

「無理じゃない・・・？」

目元を覆い隠す長さの前髪を手で横に流し、視界を開いて日向岡は

出縄に言った。

日向岡が戸惑うのも無理は無い、出縄が足を止めた所は特に急斜面であった。

山ガールという単語ができたからと言って、間違いなく人の手が加わっていきそうにないありのままの山に登るような女子は絶対にいない。

てか男でもやらない。こんな森林ウォールに登るってどんな趣味だ。

「ひゅーちゃん。」

「は、はい、なんでしよう出縄さん。」

「男ならどんなに厳しい壁でも、乗り越えるべきじゃないかなつと。」

出縄が指差す方向は、やはりどう見ても急斜面。

本当にこれに登るんですか、出縄さん。

「確かに……。」

今回の山菜狩りの発案者である日向岡があっさりと許可してしまっただ！

おい男代表！ その判断はどうなんだ！？ てかお前戸惑ってただろ！

「では、今回の山菜狩り兼健全恋愛作戦会議の本会場は、こっからスタートという事に決まりましたー！ わーぱちぱち！」

出縄一人が勝手に盛り上がる。

こんな山、登れるはずないだろ……という空気が残りの男子三人

に流れる。

そして俺には、どうして放課後に山菜狩りをするのか、山菜狩りと恋愛作戦会議とやらを同時に行おうとするのか、というかここはもう学校からかなり離れているんだけどか、こんな所で恋の話なんてする必要無いだろとか、異論ばかりが浮かび上がる。

言葉にするのが面倒だ。こいつらは本当に高校生なのか。これは高校生の発想か。

そもそもこの恋愛会議、メンバー的に成立しないだろうと先ほどからずっと思っているのだが、主催者の日向岡は分かっているのだろうか。

肩まで伸びているほどの髪を持つ彼の頭は、恥ずかしがり屋の表情を守るには持ってこいの量だ。

中学の頃からずっこの長さを維持しているらしい。

生意気にもYシャツをズボンから出しているが、不真面目な生徒と言つよりマヌケそうな三枚目としか言い表せない違和感が彼から出ている。

しかも不良っぽさを演出しようとしている割には、趣味は山菜狩りときた。

特技は山の幸をふんだんに使った料理。家庭科の時間はいつも彼の独断場らしい。授業を一人で独占すんなよ。

そんな日向岡が健全恋愛作戦会議の発案者であり主役であるのだが、こいつが好きなのは出縄だ。

出縄の前だと日向岡は何気ない日常の会話でさえもテンパってしまい、気の利いた切り返しもできなくなる。

セミロングで前髪パツツンの髪型から繰り出される、毎日クラスを騒がす眩しい笑顔（本人談）の前では日向岡はイエスと言っただけの機械と化してしまうのだ。

なんで好きな相手を会議に入れているんだよ。それもつ会議にならねーだろ。会議するなら告白しろよ。

で、もう出縄が勝手に石垣をよじ登って斜面を登ろうとしている・

・誰か止めないと三歳がりの最中にパーティが全滅するぞ。

「待てよ出縄、自転車に鍵ぐらいかけとけよ。」

俺、日向岡に次ぐパーティ三人目の男子、万田耕太郎が一人暴走する出縄に待ったをかける。

おそらくこのメンバーの中では俺の次にマトモなんじゃないかと思っている。

背高のつぼで周りより物が見えるからか。だけど性格は中学生の頃のを引き摺っているような感じだ。

物事に対し斜に構えて批判的な評価を下す。

だから日向岡みたいに出縄の言う事にイエスと言わず、物事を割としっかりと判断できる。

日向岡のいいストッパー役だ。

ストッパー役の癖に山菜狩りを止めなかったけど。

「鍵い？」

出縄が振り返って聞き返す。

「大丈夫っしょ。私達の学校のシールが張ってあるチャリをパクる勇氣がある人なんて、この辺にいるはずが無いよー。」

「一理ある。」

「ねーだろ。」

日向岡のイエス癖がまたも起きている。なんだお前、高校を何だと思っているんだ。どこの勢力と戦っているんだ。

「森子様の威を借りるってか。」

万田は特に肯定も否定もしなかった。

出縄の言う事は高校生や中学生、年の近い相手なら実際には間違っていない。

俺達の学校には撫子原森子という女子がいるのだが、彼女の存在は隅々まで、アトウギ市の学生にその存在を知られている。

見た目はとても小柄で、子供っぽくて可愛いのだが、何故か常に長袖で、何故か常に背中に剣を背負っている。

授業中も食事中も常に背負っている。第一印象は子供のような可愛らしさよりも、肩からはみ出た剣の取っ手の部分に目が行った。

都会の女子高校生は怖いなと俺は思った。

いつも生徒会長のイケメンボーイな板坂間と行動していたり、学校で誰もが様付けで呼んでいたりと、学校で最も意味不明な人だ。

それで更に他校の高校生と何度かいざこざを起こした結果、彼女を現代に生きる侍と慕う舎弟が何人もできたという。

いや、侍なら腰に剣差せよ。いや、差すなよ。どうして剣を持っているんだよ。

「森子様は強いからなー。確かこの前は窃盗グループを一人で壊滅させたんだっけ。」

「現行犯の所を、スパツとな。」

「流石は現代に生きる侍だよな。」

男子勢の会話がおかしい。撫子原森子って一体何なんだよ。

まだ俺は森子様とやらの活躍を目にしていない。

いつか俺も彼女を現代に生きる侍と崇める事になるのだろうか。都会の学生は怖いなと俺は思った。

「てな訳で山登っちゃいましょー!」

出縄は再び石垣へ手を伸ばし登ろうとしていた。

「待てよ出縄。」

「おや、どうかしたかい？ 貴則君。」

仕方ないので俺が出縄の暴走を止める事にする。

「お前がどうかしてるわ。こんな場所マジで登る気かよ。」

「自転車なら大丈夫だよ。」

「そっちじゃねーよ。」

「森子様のご加護があるから!」

「森子様神様かよ。」

「ぶっっちゃけ守り神みたいなもんだしね。」

「ご加護の前に自衛を徹底しろよ。」

「全く、貴則君はお節介ですねえ。おっかあは、そんな風に育てた覚えはありませんよ。」

出縄が石垣から飛び降りる。制服を着ているのにその動きは軽快だ。俺は俺で学ランの内ポケットに物を入れすぎていて、この格好で走るのには避けたいなと思う。

日向岡達だつて着ているのはブレザーだけど内ポケットがあるのだから同じ思いを共有しているはずだが、なんで山の中で山菜狩りなんてやるうとしてしているのだろう。

「おつかあとかじゃなくて、お前とは故郷も学校も違うわ。」

「残念、騙されなかったか。」

騙されねーよ、じゃなくて何言ってるんだよ。

「そついえば貴則がここに来てから、もう二週間経つんだよな。」

「ああ、そつだな。」

ぼつと出てきた日向岡の言葉に適当に相槌を打つ。

こいつらの学校に殴り込みをかけて早二週間。

俺は幻影のキングこと富士見希乃を全校生徒の前で殴り飛ばした訳だが、どうした事か、俺はこの学校のクラスに入れられ、教室に住む事になってしまった。

何を言っているのか分からないだろうが俺もよく分かっていない。

残念ながら俺の姉である幻影のキング、富士見希乃は何故か学校の教室の一つにソファーやらテレビやら私物と言うには大きすぎる物を数多く持ち込んで占有している。

希乃と同じクラスである日向岡、万田、出縄達も放課後になるとその教室に入り浸り、時には寝泊りまでしてしまう。

現にこの二週間の内に何度かあった。学校に泊まるっておい……。永川高校における富士見希乃の存在というのは異様なものだ。



幻影のキングと名乗ってネット上でよく分からないお言葉を発信したりしているが、その影響力はネットよりむしろ学校の方が大きいみたいだ。

永高において二年四組の富士見希乃は生徒からの注目がとても多くてイケメンボーイの生徒会長よりも人気があり、学校を代表するスターだと自分で言っていた。

あとから生徒会長本人に聞いてみたら彼も希乃の言う事をそうだねと肯定していた。

生徒会長は希乃達よりも学年が上のはずなのだが、生徒会のはずなのだが、何故か放課後になると希乃達が占有している教室に撫子原と一緒にいたりする。

それでいいのか生徒会長。

だがあの生徒会長にしてこいつらあり、とも言える。

「最初はキングルームにいるのも嫌だっけ言っていたのに、いつの間にか馴染んでるよな。」

「まず学校になんか住めるかよ。」

家出中で住む場所が無いから学校に住めって言われたら普通に引くだろ。

「え？ 学校に皆で寝泊りするの楽しいじゃん？」

石垣に肘をかけた出縄が言う。

「そついうのは付き合いの長い友人とやる事だ。」

いくら好きな事でも試合とかじゃない限り、どこの馬の骨か分からない奴と一緒にやってもあまり楽しくない。

修学旅行なんてのが丁度良い例だ。

小中高で三度あるであろう一大イベント、修学旅行。

今のところ俺は一度しか行っていないのだが、毎年、一番多い時は月一という頻度で転校を繰り返していた俺は修学旅行に良い思い出が無い。

修学旅行以外も良い思い出よりも嫌な思い出の方が比率的に多い。

小六の時の修学旅行は二学期に転校して早々の出来事だった。

誰とでも打ち溶け合える小学生と云えど、六年生の二学期に転校となると、既存の輪に入りづらくなる。

物事を深く考えるようになる代わりに、昔みたいに誰が相手でも隔たり無く接する事ができなくなる。

当時の時点で俺はその例に当てはまっていた。

とってもナイーブな時期だった。

自分が可愛くて仕方が無かった俺は他人の言葉にいつ攻撃されるか、いつ冷たく接されるのか、気が気でなかった。

不用意な言葉で敵意を引き出してしまふ事を恐れ、俺は消極的であった。

その結果、班決めや部屋決めで盥回しにされ、修学旅行に行く前から傷つく事となった。

こんな奴いらぬ。こいつのせいで班がバラバラになる。一人ぐらい人数が多くてもいいじゃないか。5人班じゃなくて6人班がいい、それが駄目ならこいつを受け入れない。

教師と争うクラスメートの姿を、俺は椅子に座って何十分も眺めていた。

閉じっぱなしの口の中で言葉にできない憤りが充満していた。

彼らは俺の事をクラスメートではなく、ただいるだけで邪魔な存在だと俺の目の前で、背後で、隣で言った。

教師は教師で、クラスに馴染めない俺の性格を責めた。

恥ずかしいのは分かるが、友達と仲良くやっていけないとこの先必ず苦労する。

その性格を直さない限り君は大人になれない。

君みたいな恥ずかしがり屋は大勢見てきたが、大人になる為に皆自分を変えていった。

大人に恥ずかしがり屋はいない。もしもその性格のまま社会の荒波に飛び込んだら間違いなく自然の摂理によって淘汰される、と。

俺にこのような事を言った教師はこいつで4人目だった。

先生の言う事、大人の言う事はちゃんと守るべきだと教えられてきた俺だったが、この頃にはその教えに疑問を抱くようになっていた。俺は教師と教室の隣の倉庫の中にて一対一で一方的に説教されていた時、口は開かず、じつと頭上の教師の目を見ていた。

口を開かない分、目に感情が偏る。

ぶつけるべき相手が分からない俺の感情は目に表れていた。

人に責任を擦り付ける口煩い大人の一方的な言葉は俺をとことん逆撫でた。

いじめは良くない事だと、どこの学校に行っても教師は皆言っていた。

そして俺に対する当たり方も、どこもこんな感じであった。

一応小学三年生の頃までののは除外だ。ホントに小さい頃は友人ぐらい作れた。

出来てもすぐ転校なんてパターンが殆どだったが。

転校先のクラスと噛み合わなくなったのは小五ぐらいからか。

悩んでいる事があつたらいつでも言ってくれ。先生は貴則君の味方だよ。

恥ずかしがらずに勇気を出してごらんよ。皆良い子だよ。

皆、貴則君と遊んであげてね。良い子だから。

どうしてお前はいつも仲間外れなんだ。友達は作らないのか。

休み時間、一人で過ごして楽しいか？ 自分から輪に加わらないと。

どうして人と仲良くできないんだ。お前に原因があるんじゃないか。

いじめってのは、いじめられる方に原因があるんだ。いじめの原因はいじめられる方だ。

修学旅行の時のクラスでも、同じ事を言われる事となった。

俺と同じ班になった奴は徹底的に俺をシカトし始め、急に気が変わったかと思えば言葉の暴力を働き、仕事を押し付け、俺は精神的に追い詰められた。

小学生の時点で茶髪に染色していた奴が特に、事ある毎に俺に因縁を付けてきた。

そのきっかけというのが女子絡みだったというのが何とも小学生らしい。

今となつてはいい笑い話になっているだろう、あの茶髪野郎の中であの学校の時は珍しく女子の友人が出来て修学旅行に微かな希望を見出していた事もあったのだが、茶髪DQNに見事に台無しにされた。しょうもない。

修学旅行に限らず、放課後のちよつとした集まりでも気の良い友人達だけで行ったとしたらさぞかし楽しい事だろう。

が、普通の生活を送っている日向岡達はそんな事は気にしていないし思いつきもしない。

こいつらにとつて、毎日友人と遊ぶ事はごく普通の事だ。だから友達と遊ぶ事の有り難味をそれ程意識していない。

だけどそれは悪い事ではない。意識するようになってしまったら友達を純粹に見られなくなるかもしれない。

友人を自分の日常を充実させるアイテムとも捉える事ができてしまう。

そんな捉え方をしてしまったら日常が気が気でなくなる。

捉え方を忘れる事も中々できない。頭に染み付いてしまう。

「でも貴則君はお姉ちゃんという友達の垣根を超えた人と毎日寝泊りじゃん。」

「何が悲しくて実の姉と家ですらない所で寝泊りしなくちゃいけない

いんだ。」

「あ、ごめん……。気に障った……。？」

ハツと出縄が我に返ったかのように表情を変えて訂正する。

「家の事は気にしなくていい。姉と寝泊りしなきゃいけない事について謝れ。」

「え、えー……。」

現在家出中の俺には住む場所が無い。

両親が他界した俺は少し前まで施設で暮らしていた。

施設に移ってから転校はしなくなったものの、俺が学校に馴染む事はまたもやなかった。

学校が気に入らなかった俺は旅に出る事にした。

なんだかんだで転校を繰り返して学校を巡るのも、今となってはアリだったかなと思う自分がいる。

どこの学校も、生徒も教師も気に食わない奴らばかりだった。

だが次は、次こそは良い学校だろうと転校する度に微かな希望を抱ける。

学校はどこも居心地が悪かった。

ごく一部と一時期を除いてほぼ全てが居心地の悪い所だった。

俺がこの学校に来たのは幻影のキングという名前の奴がこの学校にいると思ったからである。

中学生でさえもその統一性の無さに呆れてしまうネーミングセンスには覚えがあった。

遠い昔は、小学校低学年の頃までは父と母、そして姉である希乃と、ちゃんとした家族の形で暮らしていた。

そしてごく普通の家族関係だった。姉と弟で漫画やテレビ争奪戦な

んで微笑ましい光景も日常茶飯事だ。

希乃は年上というアドバンテージをふんだんに使って幾度も俺を敗北へ追い込んだ。

結果、希乃は漫画とテレビの影響を若くして大きく受ける事となった。

人格は早熟な成長を果たし、小学生の時点で中学生レベルに匹敵する趣味を会得した。

しかしどうした事か、あれから5年経ったはずなのだが希乃はそれから成長していないように思える。

高二の女子が幻影のキングを名乗るってどういう事だよ。

せめて幻影の王とか主とか盟主とかで満足しとけよ。

周りもノリノリで呼んでるぞ。一体いつからキングと呼んでいるんだろ。

学校の教室を勝手に占拠して、全校生徒からキングと呼ばれて、なんか勝手に目立っていて。

残念ながらこれが俺の姉だ。

小学三年生のある日の朝、父と一緒に蒸発したきり二週間前まで一度も会う事が無かった俺の姉だ。

蒸発したと気づいた日、家から二人の姿だけが消えていた。

二人がいなくて、他は何も変わらない家。

だけど俺には二人がテレビや机なんかとは比較できない、とてもとても大きな真ん中に位置するべきピースを失ったように思えた。

パズルの癖に一枚の大きさが均等じゃないなんて、これじゃあ壁に飾るなんてできないじゃないか。

こんなのは絵じゃない。絵として認められない。

その後、収入を失った母に連れられて俺は日本を転々とする事になった。

「なんと辛辣な・・・それ聞いたらブラコンの王様が泣いちゃうぜ。」

日向岡がニヤケながら俺へと視線を持っていく。

「いや、最初からずっと泣かすような言動ばつかる。」

万田の訂正の通りだ。

人に黙って消えておいて、ようやく見つけたと思ったら校門前でぶざけていた残念な幻影のキングを殴って修正。

しかしそんな生易しいやり方では治らないのが幻影のキング。

教室を占拠しているのだ、そこに住めだの、お姉さんと一緒に二人暮らしだよ・・・だの、とんでもない姉だ。

一方的で我が侘な姉だ。

そんな姉と、姉が牛耳る学校で暮らさなきゃならない。日本放浪の旅に終止符を打って。

あの日、希乃が消えたのを境に俺の人生は大きく変わった。

「あんなに希乃キングは貴則君の事好いてるのにねえ。良い姉弟関係だと私は思うよ?」

「好き方がおかしいだろ。」

出縄は俺の返答に不思議そうな顔を覗わせるが、いや、どこが良い姉弟関係なんだよ。

どう考えても異常だろう、希乃の行動は。



「なんたって希乃はキングだからね。」

「キングで許容すんな。」

「キング級の愛だよ。」

「重すぎるわ。キング級に迷惑だ。」

一歩ずつ、段々と出縄が俺に近寄って来ている。なんだその妙な笑顔。

「キング級に仲が良いって事じゃん。」

「それはキング級のこじつけだ。」

「じゃあさ、どーしたら貴則君は希乃キングと仲良くするわけさ。」

「とりあえず距離が近い。」

なんで鼻と鼻がぶつかりそうなくらいの距離まで近づいて直立で真正面に立って顔を合わせてるんだ

よ！ この距離で何その笑顔！？

中学二年生と高校二年生だが出縄とは身長差があまり無い。

俺の方が低い、という訳ではない。あくまでも身長は同等だ。女子に劣っているはずがない。

若干出縄の視線が高い気がするが、きつと気のせいだ。

「希乃キングとの距離を表わしてみました。」

「キング級の一方通行だ！」

「駄目だよ、そういう突っぱねた言い方。」

デコピンがパンツと額に当たる。

「こんだけ迫られたら普通逃げるだろ。DVだ、圧迫式DVだ。」

「言葉の暴力の権化が言うか。」

万田が横目で俺と出縄を見てボソリと言った。

男子と女子が超近距離で向かい合ってる状況にツッコミを入れる訳でもなく、あきれ返っている様子だ。できればツッコんでくださると助かります。

「いい加減離れる。」

仕方ないので自分から後ろへ下がる。

「意識するの遅すぎじゃない？」

「何をだよ。」

「異性をだよ。」

「だから近いつて言っただろ。」

「感想それだけー？ まさかお姉ちゃんと暮らしてる時もそんな感じなの？」

「まさかって何だよ。」

「お姉ちゃんと二人きりで夜を過ごすんだよ？　それは青春以上のロマンチックになるって決まってるじゃん。」

目を輝かせて、なにやら何かを期待しているようだが・・・こいつは二人きりで学校で生活させられるという事を何だと思っっているんだ。

あんなじゃじゃ馬に今も昔も人生を左右させられ続けているんだぞ。今更どういふつもりで俺と接している。

あいつの無邪気に笑う様から罪悪感みたいなものは感じられない。それがとてもむかつく。

「気持ち悪いわ。」

「・・・なんというか、まさか貴則君って恋愛会議にとっても不向き・・・？」

「第一興味無いし。」

俺がこの場にいるのも日向岡と万田に無理矢理連れてこられたからだ。

俺がいる必要性が分からない。年下に相談してどうするんだよ。くだらない、とてもくだらない。

放課後に人気の無い山の中へ山菜狩りだの恋愛会議だの。

俺が来てから二週間、こいつらは毎日毎日くだらない事ばかりやっている。

誰かが何かをどんな小さな声でもボソリと呟けば、誰かがそれを聞き取って共感して、やがて教室中に言葉が循環し、幻影のキングへと届く。

そして学校の王様が宣言するのだ、朝から放課後まで全力で教師から逃げ続ける鬼ごっこだとか、第二次スーパー購買大戦開戦だとか、野球大会だとか。

学校の秩序を壊して自分の意のままに動く。

俺が今まで巡ってきた学校のどこでもそういう人間は何人もいた。教師の存在と、目の前で行われている授業を無視して別の事をやり始める。

彼らは授業が行われている教室にも関わらず、さも自分には関係無いかのように教科書を閉じ、椅子から立ち上がり、沈黙を平気な顔で破る。

注意する教師に彼らは言う。

他の人に迷惑はかけていない、と。自己責任で俺は動いているんだ、と。

そういう奴というのは大体、普段日頃で存在自体が迷惑な奴だ。

人の何気ない行動を、時には正しいはずの行動を軽蔑の対象とする。奴らには正しいか間違っているかという価値観は無く、面白くなるかどうかで言葉を発する。

自分が間違っているという思考には絶対に辿り着かない。

そういう土俵に立とうとしないから、どう批難されようとも彼らは関係が無いように振舞う。

自分へ非が届かないようにする。最低だ。

こいつらは少しズレているが、それでもやってる事は生徒としての義務の放棄だ。

授業の放棄はごく偶にの話だが。いや、二週間に一度あった時点でそれは偶にはないか。

俺が今まで見てきた奴らのように悪意があるのか周りが見えていないのか判断に迷うが、問題児だという事に変わりはない。

それもクラスのごく一部の人でなく、幻影のキングを中心として全員が彼女に巻かれる。

一人の問題児の行動をその場で批難せずに見て見ぬ振りをするより

も性質が悪い。

事なかれ主義、周りに合わせる主義、空気を読む主義。他を尊重し、個を蔑ろにする雰囲気。

だが時には忽然として個を主張し出す事がある。主に、上の立場の人間に対して。

実際のところ子供に主義主張なんてものは存在していないのだろうと俺は思う。

だから俺はそういう奴らとは違った存在として立ち振る舞う事に、小学五年生の頃に決めた。

物事の善し悪しを判断しようとせず周囲を試みない利己的な行動を取り、弱者を助ける力があるはずなのに力を使おうとしない、変化を起こさない生活の仕方に俺は苛立った。

目の前にいる人が苦しんでいる、寂しい思いで過ごしているのを見ていながら分かっていながら助けない。そして後になってドヤ顔で勝手に述懐するのだ、あいつは今頃どうしているのかな、元気にやっつけていけるのかな、と。

俺は周りがどうであれ堂々と行動する事に決めた。

堂々としていれば休み時間に一人でいても、宿題を学校でやっていても、本を読んでいても何もおかしな事は無い。

ポーツするのも宿題をするのも本を読むのも誰だってする事だ。

した事が無い人はいないだろう。他人に合わせてばかりいたら何もできなくなる。

俺の通った学校はどこも善悪を考えない奴らと何もしない奴らしかいなかった。

そんな奴らの中にいるのは息苦しくて辛かった。

俺にとって奴らは仲間ではなく敵だった。存在しているだけで害悪だった。

奴らの俺を見る目には悪意が感じられた。

ならば俺は戦わざるを得ない、敵に負ける訳にはいかないのだから。

「大体お前らが勝手に俺を連れてきたんだろ、こんな山の中に。これじゃまるで拉致じゃねーかよおい。」

「え？ 拉致つたつもりだったけど。」

日向岡が迷わず即答！？

「身勝手すぎるだろそれ！」

「だって貴則だしね。」

「その一文に納得できる要素があったのか！」

「大丈夫、貴則なら通用するさ。」

「何にだよ！」

無理矢理入った山の中の森林には薄っすらと獣道が幾つか通っており、思った以上には登りやすかった。生い茂った木々は空の色をも遮り、白い光が青色を塗りつぶしている。

獣道の脇に生えた草は様々な種類が膝どころか腰まで伸び、獣道に垂れかかっているものもある。

草を足で押しのけて突き進んで何処か分からない所へ登る。

登りながら雑談し、頂上に着くか何か見つけたりしたらようやく来た道を引き返し始める。

俺は毎回この山登りから生きて帰れるのかという不安に襲われる。登るべき場所じゃない所から山を登って道なき道を歩かされるが、俺達が進んでいく道には格別珍しい人工物は見当たらない。

森へタイヤやらブラウン管のテレビやらが不法投棄されている様はよく見る事がある。

だがこの山には人の手が入った気配が無い。

日本語が一切書かれていない、アラビア語とか韓国語とかみみたいな英語とはかけ離れた形の文字で埋め尽くされた本を読まされている気分になる。

もし今歩いている道の脇に色褪せたデスクトップパソコンが放置されていたとする。

そのパソコンは会社が倒産して備品を売りに出そうとするも型があまりにも古すぎた上に長い間放置していた為に値が付かず廃棄を業者に頼むのも金の都合で断念、車に積んで夜中らに山へ登って逃げるように捨てた・・・

なんて灰色な話も想像できる余地があるのだが、この森林からは人の言葉で理解できなさそうな雰囲気漂っている。

この生い茂る森を見ても特別な思いや物珍しさあまり湧いてこないのは人の手を離れ勝手に生えている木と、目的を持って作られた人工物では人工物の方が親しみがあるからだ。

草花よりテレビ、ラジオ、パソコンなんかの方が数倍見慣れている。ただ森林の中を歩くだけでは同じような光景が続くだけで変化が無い。森林の中に人工物というイレギュラーがあるからこそ特別な物を見つけた気分になれる。

街の中で木を見ても特に何とも思わないのだが、森の中で見つける人工物には特別な感情を抱ける。

人の手の入ったまともな道の無いこの山の中で今、重なり合って視界を遮る目の前の木々の先に古ぼけた茶色い小屋が、くすんだコン

クリート色の建物が、見えてきたとしたら俺はこのメンバー達と競走する勢いで不自然な建築物に入ろうとするだろう。

住んでいた学園を抜け出してからは人目の付かなそうな所を探して野宿をしていたのだが、陽が沈みかけ始めた頃にまず最初に探すのが建物の廃墟であった。

元病院だったり放置された民家だったり廃校成り立ての一見ごく普通の校舎だったり、住宅街の真ん中にある物があれば山の中にひっそりと一般的に想像し易いセオリー通りに建っている物もあった。建物は雨風をしのげる上に放置された民家ならば他人が入ってくる事はほぼなかった。

廃校や廃病院でも部屋の数と広さがあったので見つからずにやり過ぎた事も多かった。

侵入者は常識知らずの荒くれ者と言っても年が近い少年や変わり者が殆どで危害を加えられた事は無かった。面倒な相手だと思った事は何回もあったが。

真夜中に初めて集団で囲まれて起こされライトを当てられた時なんかは心臓が緊張でガチガチに固まった。6人ぐらいいただろうか、そいつらは髪を黄土色や茶褐色に染めているような奴らであったが、今まで出会った学校のクラスよりは好感が持てた。

俺は全国を旅している、色んな村とか廃墟を巡ってきたと話したら彼らは目を輝かせ喰いついてきた。彼らは初めて廃墟に入ったと言っていた。

住宅街の外れの道の脇の森の中に建っていたコンクリートの建物は地域でも有名な場所であったが街灯もろくに無い道の上に黒い噂が絶えないらしく、不良でさえも殆ど訪れる事は無いという。

どつりで廃墟にしては形がある程度残っているなと俺は思った。

俺は人気を避けるように裏口から入ったせいか、コンクリートの素っ気無い建物という印象を持っていたがどうやらどこかの資産家が立てた洋館だったらしい。



ああ、あの建物は俺が訪れた中で一番立派な廃墟だったな。

誰が寝ていたか分からないベッドに寝転がるのは流石に気が引けたのでやらなかったが、あの夜は6人の少年達と大分話しこんで楽しかった。

あいつらは浪漫というのが分かっていた。

今まで俺が通ってきた学校の奴らは男心を擽るような経験に自ら飛び込むような事をしないんだろうなと思った。

彼らは見た目と違って純朴さを中に秘めていた。

学校の奴らは排他的で冷めていて特徴が無い奴らだった。

この森の中で廃墟の洋館を見つけたとしても興味を示さないんだと思う。

あいつらは何を楽しみに生きているのかよく分からなかった。

「貴則。」

「ん。」

前を歩く日向岡が俺に話を振った。

山菜狩りというのは言葉だけで、メンバー達は日向岡の惚気話を聞いてばかりである。

日向岡は好きな女子が近くにいるのだが、友人から恋愛の対象へステップアップするにはどういう風に接していけばいいのかと聞いてきた。

好きな女子が近くにいるというのは一字一句文字通り合っている。

日向岡のすぐ目の前を歩いている。出縄、日向岡、万田、俺という順でメンバーは山をダラダラと登り続けている。

この中で山菜に興味があるのは日向岡ぐらいしかいないのだが、当の日向岡本人も話している内容は専ら山とは関係の無い話だ。

山菜狩りなんて名ばかりで、これは日向岡による出縄との距離を縮める為の作戦なのだ。

「貴則って恋をした事ある？」

「特には無い。」

「ダウト！」

「馬鹿らしい。」

「馬鹿でも一途ならカッコいいじゃない。」

「なら勝手に告って傷ついて死ね。」

「告白したら致命傷う！？　なんでフラれる事が前提なんだあ！」

「ひゅーが、勝算はあるのか。」

万田が日向岡に聞いた。聞いてやったといういい加減な言い方だった。

「しょ、勝算って、恋愛感情をそういう言い方で表すのはどうなんだ。」

「で、告ったら受け入れてもらえると思うのか。」

「……。」

万田の問いに日向岡は沈黙した。

「だから、評価をグンと上げる為に皆で会議するんでしょ？　大丈夫だよひゅーちゃん、そういう事ならこの私に任せっなさい！」

日向岡に助け舟を出すかの如く、出縄が胸を張り軽く叩く。

そんな振舞い方をしてもここにいる奴らは誰もお前に頼らねーよ。

「うん、頼りにしてるよ出縄さん。」

日向岡は言ったが万田は無言を貫いた。言葉にするまでもないしな。どう頼りにするつもりなんだよ日向岡は。

「ひゅーちゃん的にはさ、あとどれぐらいの距離だと思ってる？好きな子との距離。」

「え、ああ、結構な線は行っていると思うんだけど。」

ええ、限りなく近いですよ今現在。

「そんなに行っているならもうあと一息じゃん！ ゴーンと行っちゃえばいいのに！」

「いやー……」

「何か不安な要素でも？ でも相手の気持ちを完全に読める人なんていない訳だし。」

まあ告白ってカードは一発切りしか使えないから何か別のクエスチョンを出してみればいいんじゃないかな、告白に近い何かを。」

「告白に近い何か？」

「とりあえず抱きついてみる。」

万田が会話に割り込んだ。

「捕まるわあああああ！！！！」

「はっ！ 相手がOKを出せばそのまま告白のラインを飛び越えられる……！？」

しかし出縄が感化されてる！？ 告白よりハードル高いだろそのカード……！！

「確かに飛び越えてるけどそれは違う方向だあああああ！！！！」  
珍しく日向岡の出縄に対するイエスマンモードが解除された。

「いや行けるよひゅーちん！ 男はグイッと強引に女の子をリードしないと！ ってというのが流行りらしいし！」

「抱きつくのが流行り！？」

「近頃は草食系男子だなんて言葉がテレビ新聞など大衆社会で踊っている世の中だしね、つまりはそういう事なんじゃない？」

「じゃあちよつと日向岡に抱きついてもらえよ出縄。」

また万田が言った。

「え、ええ！？」

当然、出縄は困惑の表情を見せる。

「お、ちよ、え、ぐう？ 何言い出すんだよ耕太郎！」

日向岡が足を止めて後ろへ振り向き両手を上げる。

出縄と万田も足を止め、最後尾の俺も少し距離を取って止まった。

「さあ、肉食男子へと昇華する時だ。」

「それは肉食じゃなくて変態だ！」

「なら一生草でも食ってる！」

「変態か草食うかの二択かよ！」

「ああセクハラか草食うかの二択だ。」

「やっぱ変態なんじゃねーか!！」

「ふっ、だからお前はいつまで経っても日向岡なんだよ。」

「俺はいつまでも日向岡だわい、あと勝手に人の名前を不名誉的な名詞にするな。」

「仕方ない、ここは互いに同意を得た上でやってみるしかないか？」

万田が振り向いて俺に振る。自分から提案しておいてなんで疑問系なんだよ。

「勝手にやってるよ。」

あまりにも馬鹿らしいので投げやりに答えた。

「うわあ！ 貴則君まで良識を失ったあああ!？」

「という訳だ出縄、肉食系が好きなんだろ？ なら」

「わ、私は例外で！ 例外で、お願いします！」

出縄が大慌てで両手で万田を制した。

まあ、そりゃそうだな。

日向岡が萎むように視線を下に落としたが、好きな人に抱きつのがNGと言われたら現実的な方法ではないにしろ確かに俺も落ち込むかもしれない。  
いきなり抱きついたりなんかは絶対にしないだろうが。

「そうかい、それは残念。面白いと思っただけだな。」

「人で試そうとしてんじゃねーよ!」

「そつだよ、悪ふざけはいけない事だよね。」

悪ふざけはいけないけど賛成してたたる出縄。  
軽く息を吐いて間を空ける。

「うん、やっぱり急に抱きつくのは無しだね。ビックリするもん。」

出縄が男性陣へ再確認するみたいに言った。

「それじゃあ何か他の案を。」

「男は黙って直球勝負だ。」

「黙れ耕太郎。何か出してよ貴則。」

日向岡が俺へとパスを出す。

興味が無いと何度も言っているのにこれだ。人の話ぐらい聞けよ日向岡。

実際に俺はそんな経験を積める程の余裕がある人生を送ってきていない。

幾つものクラスから何回もハブられ続けてきた俺が他人へ恋をするなどそんな余裕が一体どこにあったのだろうか。

出会いだなんてとんでもない、俺はいつも置物だった。初めての会話も初めてという特別さを持っていなかった。

俺という存在は置物として固定されていたからだ。例えばこつちに話す意思があったとしても、相手には自発的に置物と

話す気なんて起きるはずもない。置物と会話をする人はいない。

置物はただ遠くから眺めるものだ。置物について何を思おうが誰も傷つかない。

置物を気にする必要は無い。



「だから無いって。」

「あのなあ貴則、中学生つてのは多感な時期なんだぞ。」

「お前の中学生の頃を例に出せ。」

「お前と俺じゃ比較にならないだろ。」

「ああ、お前がモテているケースなんか想像できないしな。」

「俺は別に不特定多数の女性にモテたいって訳じゃないんだよ。」

「そんなのお前の見た目で丸分かりだ。」

ボーボーに伸ばした髪で見た目を気にしている癖に気は小さい男となれば、チャラ男という基準より更に下に見られるのは当然である。自分を格好良く見せたいと思う奴は大体この年だと整髪剤なり、行き過ぎた餓鬼になるとピアスなり髪を染めたりして自己主張を行う。あのいつしかの金髪野郎みたく。

「数多の土地を渡り歩いてきた貴則なら・・・貴則なら俺に文殊の知恵を授けてくれるはずっ！」

「行く先々で女性を口説いて回っていたみたいな完全なるでっち上げの虚実をばら撒いて変な期待を抱くのは止める。」

「でもさ、恋沙汰とか一つぐらいはあっただろ？ あるだろ？ じやなきや将来旅をする時に夢が持てないじゃん？ 旅をすれば出会いはあるんだろ？」

「普段冴えない奴が旅行つたつてモテるはずないだろ。普段からモテてないんだから。」

「なんと、夢も希望も無い話だな・・・。」

実際に行動に移すのが難しい物事に対し幻想を抱く。

午前二時に薄いリュックサックを右肩にかけて非常口の緑色の明かりが不気味に、ここぞという場面なのにしんみりと照っている廊下の真ん中を歩いた時の俺も旅というものにはあこがれを抱いていた。だがその時の俺は意外にも緊張や興奮の念を抱いていなかった。

寮を抜け出したその時まで俺は誰一人にも旅に出る事を告げなかった。

黒い学ランを着て真夜中に外へ出ようとするような子供は何か変な事を考えていると誰が見ても怪しむに決まっているので不用意に音を出さないようにするべきだと頭に入れてはあった。

しかし何故か俺は微かな足音と服が擦れ合う音が出ても廊下を歩いている時は気にしていなかった。気にならなかった。

音が出ているのは聞こえていたのだが俺はそれが頭の中に一旦入って行ったのに関わらずどこかへ流れ出てしまったのか、俺は歩き方を変えるのも歩く事を止めるのもせずに玄関へと向かった。

歩いている最中は廊下に誰か出てくるような気配がずっとあったのだが、俺は見つかるかどうかよりも早く出て来いと身構えていた。

胸が締め付けられるような感覚が無かったという事に気づいたのは寮を見下ろせる丘まで走ったからであった。

寮の門の横のフェンスをよじ登り住宅地の階段を駆け上って、一休憩取ろうと丘の上公園という所で寮を見下ろして初めて自分が異常に落ち着いた気持ちになつているのに気づいた。

あの寮で暮らしていたのはたった3ヶ月程度で、寮の周りの街を見下ろしたのはこの時が初めてであった。

周りは音一つ聞こえず静かだったのだが俺の息遣いと衣服の擦れ合

う音は収まることは無かった。

足音やドアを開け閉めする音、日常生活の音より目立っていて誰か一人ぐらいと言わずに誰でも気づいていいだろうと思ったのだが結局誰にも気づかれないうまま俺は寮から脱出できてしまった。

ひよっとしたら誰か一人か二人が俺の姿を脇からジツと見ていたのではないかと勘繰り少し背筋が冷えたのだが何かが起こる事はなかった。

静寂に包まれた住宅街にその日起きた異変は俺一人による逃亡劇だけであった。

観客は誰もいない。気づいた頃には俺はもう舞台にはいなかった。

いざ舞台に勇み足で立ってみはしたが思った以上の緊張も喜びも味わう事無くあっさりと幕が閉じてしまった。どうしようもない遣る瀬無さが俺の捻れた神経をゆっくりと解した。

「俺だったら人との出会いを大切にしながら田舎町を巡っていくね。お爺ちゃんお婆ちゃんと田んぼで会ったりとか、田舎に泊まるとか。」

日向岡は分かっている。

手の届かない世界は距離がありすぎて人には正しく想像をできない。心の中では既に自由気ままに田んぼの広がる田園地帯を口笛吹きながら歩いている姿を想像しているんだろうな、こいつ。

アトウギの田園地帯なんかとは比べ物にならないような壮大さのある場所はいくらでもある。

言う人は言う、アトウギの田園地帯は凄い良い場所だと。

だが俺はそれよりも凄いと感じる景色の田園地帯を幾つか目にしている。

日向岡はそんな広い田園地帯を空想の中で歩いている事だろう。

見慣れてない人からすればアトウギの田園地帯でも十分良い光景だと思えるだろうが、それでも見慣れた景色を超えるものを求めたくなってしまう。

誰でもそうだろう。

だが言葉だけで行動をしない人間に自分の行動についてとやかく言われるのは腹が立つ。

「口だけのドヘたれ野郎にそんな事できる訳ねーだろ。」

「し、失敬な。」

「いつも口だけで何一つ実行しようとしていない。何を根拠に旅に出るだ、爺さん婆さんとの出会いを」

楽しむ、だ。目の前の物事にも対処できないような奴が何ぬかしてんだ。」

喉に熱気がこもり不快感が増していた。

この不快感を早く体内から吐き出さないと脳まで回ってきてしまう。

「それを会議しようってさっきから言ってるんじゃないかさぁ……」。

身体が前に傾垂れながらも日向岡は顔を上げて俺を見る。勘弁してくれよって表情だ。

「だがお前はどうせこの会議を活かせないだろ。」

そりゃそうだろ、と俺が心の中で言う前に万田がこぼした。

「活かすさ……。」

「声が小さいんだよ。」

「関係ないだろ。」

「自信が無いっていう表れだろ、てめーには無理だ。現時点でできてないんだからこれから先も絶対にできない。できるって言うのならとっとと実行に移せノロマ。」

「それでできたら苦労しねーよ。」

「しろよ馬鹿。」

「何をすればいいんだよ。」

「告ればいいじゃん。」

「むっ、無茶を言っなよ。」

「できるだろ。しろよ。」

相手は目の前にいる訳だが、日向岡は目視せず俯いていた。

「思い立ったらすぐ行動すればいいだけの事だ、それは簡単にできる。俺はそうしている。俺は常に自分の気持ちに素直に動いている。」

「お前は素直すぎるって。」

「居場所の無い学校を抜け出す事の何が悪い。」

「だからって一人旅を、それが理由でやれるような奴はそうそういないぞ。」

「ここにいてるって言うてるんだよ。そしてできている。できるんだよ。論より実行って言葉があるだろ、そういう事だろ。できる事だつて分かってるから踏み止まるつかどうか考えたりするんだ、可能という事実さえ出ていれば考えるのは時間の無駄だ。やらなかったらやらなかったでそのままずっと後悔するのは目に見えている。やりたいと思えるから考えられる。」

それならやれよ。と言おうと思ったが自分がとても長く語っている事に気づき口が止まった。

自分にしてはとても珍しいと思った。胸の中でグルグルと回り、溜まっていたものが吐き出したのか、声もいつもより少し高く、大きかったような気がする。喉も少し痛い。

「中学二年生にここまで言われた気分はいかなものでしょうか、会議の主催者の日向岡さん。」

「ぐう……。」

沈んだ日向岡の顔を出縄が恐る恐る覗つた。

日向岡は何も言い返せないというよりも考える事を放棄しているように見えた。

視線を落とすも目は俺の言葉に対し苛立っている。

俺の言い分が正しいと分かっているにもかかわらずそのハードルは高いものに感じる。

そもそもこの場に告白したい相手がいるという時点で。

だがいてもいなくても日向岡は不安を盾にして決戦を先送りしていくだろう。

リスクが最小限になる時まで待ち続けるだろう。そんな時は来ないと思う。

「ま、まあまあ、そう気を落とさず……。」

「中学二年生にボロクソ言われた……。」

「ドンマイドンマイ。」

日向岡がどんどん沈んでいく。

変なところで妙に強気で、その癖ヘタレで浮き沈みが激しすぎるナイーブな男の頭を出縄が撫でて励ます。

へタレの日向岡は照れた顔を隠せず、顔を伏せた。

「ちっ、良かったなりア充めが。」

万田が後ろではやし立てる。棒読みだが。

「うるせーよ耕太郎。」

「羨ましいだろう耕太郎。」

照れ隠しをする日向岡に出縄が続いた。

「別に羨ましくないから。」

「へえ、これでもか？これでもか。」

そう言いながら、俺達に見せ付けるように出縄は両手で日向岡の頬を軽くぺちぺちと叩き、すり、頭へと手を戻し、髪の毛をクシヤクシヤにした。

「うぐ、うぐ。」

もうこれは遊ばれている領域だが当事者はとても満足そうだ、笑みが口からこぼれている。

「そんなに甘やかしていいのか、出縄。」

「やっぱり羨ましい？」

「躰を疎かにすると手に負えなくなるぞ。」



「ちょ、俺は犬って事かよ。」

日向岡がようやく顔を上げた。そしてまるで犬のように吼えた。

「え、犬でしょ？」

出縄さんが犬扱いを容認！？

「なんでもう確定しているんだよ犬って！」

「はいはい、いい子いい子。」

「うむう。」

出縄が撫でて日向岡を封じる・・・日向岡はまた顔を伏せた。それでいいのか日向岡。

「・・・前進してるうちに入れていいのだろうか、あれは。」

「ああ・・・。」

万田と二人、後方へ下がって縮小して作戦会議。

はたしてこの恋愛作戦会議、大成する日は来るのだろうか・・・言葉にしなくてもまず勝ち負け以前の  
問題に見えるのだが。

1 - 9 灰色の鎧を纏った巨人（前書き）

ようやくロボット要素が出始めるといふ物語の構成の悪さ

1 - 9 灰色の鎧を纏った巨人

と、俺達が呆れた様相を見せる、少し捻くれた友人役を演じた時であった。

甲高い音が聞こえた。

大きくも小さくもなく、だがとても目立つ音が聞こえた。

風が木々の葉を揺らす音、どこからともなく聞こえてくる鳥の鳴き声とは違う音が、山の音の上を通過して耳へと伝わってくる。

音は何重もの山の音をすり抜けて俺の頭の中を震わせた。

何かの機械だろうか。

だが山の中に何の機械を持ち込むのだろうか。

道路が近くにある所まで俺達は登ってきたのだろうか。

「なんだ？この音。」

日向岡が音を探して辺りを見回した。

当然俺達を囲っているのは木と草花だけだ。

それに木々の向こうも暗くて見えない。

音は間違いなく近づいてきている。

甲高い音が押し寄せてくる。

甲高い音の次に物凄く低い音も聞こえてきた。

今度は足元が揺れたような気がした。

甲高い音と低い音が上下から来る。

左からか。

俺が向くのと同時にその場の全員が左を向いた。

音は大きくなっていく。

「歩いてる、エーディーエーか？」

エー・・・ディー、エー？

万田の口から聞きなれない言葉が当たり前のように放たれた。

斜に構えている事で有名な冷めた少年が、エーディーエーなんて固有名詞があたかも存在するかのよう。

中二病なんて言葉は真っ先に嫌うような男だぞ。

しかも歩いてるってなんだ。

交互に聞こえる甲高い音と低い震える音は確かに足音のように聞こえなくもない。

低い震える音が地面を揺らしている。

だが甲高い音は間違いなく機械の音に違いない。

鉄と鉄が擦れ合うイメージが頭の中にすぐに沸いてくる。

「なんでこんな山の中にエーディーエーが？」

日向岡が万田の予想に疑問を投げかける。

なんだよエーディーエーは山の中にいちゃいけないものなのか。

人が歩くような道じゃない所にいる俺達も俺達だと思っただけ。

エーディーエーさんに人権は無いのか。

って機械音出しているものに人権ってなんだ。

「もしかしたら俺達、何処かの組織の領域に踏む入れてしまったのかもしれん・・・。」

「ちょ、や、やめるよ・・・そんな事言ってホントにリベリオンとかの拠点があったりしたらどうするんだよ・・・。」

日向岡の中では組織と言ったらリベリオンなのか、こいつらはさっきから一体どこのローカルトークをやっているんだ。

聞きなれない機械音はますます大きくなってきている。

「まだアトウギにリベリオンの勢力は来れていないはず・・・エーデーイーだとしたら偵察、でもこんな山の中で・・・？」

出縄まで真剣な顔つきで何か言い出した。

なんですかこれ、男女間でも使えるホットな話題か何かなんですかエーデーイーって、何ですかリベリオンって。アトウギではそういうの流行っているの？

かれこれ二週間この街にいるのだが、一度もエーデーイーなる単語を俺は耳にしていない。何この流行、突発性なんですか。

「おいお前ら、さつきから何なんだよエーデーイーって。」

「エーデーイーだよ。」

日向岡に疑問を投げかけるも俺には理解できない返答がきた。

「それが何なんだよ。」

「それが何ってヤバいだろ、こんな所でエーデーイーと鉢合わせだぞ。」

薄っすらとだが日向岡が青ざめている。

青ざめ方がおかしい。

なんて顔していやがるんだ、こいつが真面目な顔をするのはどこか滑稽に思えるのだが、こんな不安さを全開にした表情をされると、何かがおかしいと感じる領域になる。

滑稽だとかネタにははいけないような迫力がある。

「もっと具体的に言えよ。まず物なのかよ。固有名詞かよ。何なんだよ。」

「いや、だから・・・」

ガサツ、太い木の枝が誰かの手ではらわれて揺れる音がはっきりと聞こえた。

機械音の主が来たのだ。

「エーディーエーだ・・・。」

俺が機械音の主の姿を見たのは万田が言葉を発そうとしたが目の前の状況に動揺して予想以上に小さくなってしまったと思われる小ささの声で呟いたのと同時であった。

幾つもの木の枝が灰色の箱みたいなものを遮っている。

しかし視線を落とすと灰色の箱は二方向に形が分かれていた。

まるで人の足だ。

だがまた灰色の箱を見上げてみると、木々の間から灰色の箱がちょうど頂点みたいな位置から光を点している。

箱の上に小さい箱が付いたようなところで周囲の木に付いている。の葉よりも明るく、緑色の光を横一線に放っている。

発光している部分はまるで目かセンサーのようだ。

日曜日の朝にやっているヒーローの顔に似ている。

顔が付いているって事は、よく見てみればこいつは人の形をしているんじゃないか。

腕もしつかりと二本付いている。

灰色の鎧を纏った巨人だ。

周りの木々よりは少し劣る大きさだが威圧感是十分にあった。

日向岡達が怯えるのも分からなくもない気がする。こいつは俗に言

うロボットって奴なのかもしれない。

教科書に載っているような工場で使われている物とは大違いだが、こいつこそがロボットらしく思える。灰色の肩、膝、頭に塗装された青色のラインが一般人の期待するようなロボットらしさをアピールしている。

こいつを街中に出してみろ、大体の人はこいつをヒーローだと認識するだろう。

ちびっ子達が見たら憧れを抱く事だろう。

というか、何だよこれは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8220y/>

---

王様狩りに行こうよっ！

2011年12月15日00時49分発行